土木学会第51回年次学術講演会（平成８年９月）

II-225

河川整備に対する住民の評価

群馬大学　正　員　小葉竹重機
群馬大学　近藤良夫
富士ピーエス　渡邊　平

１．まえがき

近年では親水性をテーマにしたウォーターフロント開発が盛んに行われるようになり、市民の間にも親水性、ウォーターフロントなどという言葉が定着しつつあるように思える。しかし、治水という重い荷物も一緒に背負わなくてはならない河川行政者と、親水、自然にだけ目を向けていればよい一般市民との間にはなお意識の隔たりが感じられる。本研究はこのような観点から、実際に行われた河川事業に対する一般市民の反応をアンケート調査によって調べ、今後の河川事業の進め方について検討を行おうとするものである。

２．アンケート調査の概要

渡良瀬川は利根川最大の支川（流域面積約2,600km²）であり、広い高水敷の利用が盛んである。とくに中流部に位置する足利市では高水敷の公園化が進み、そこで行われる夏期の花火大会は北関東最大規模のもので東京方面からも多くの見物客が訪れる。その上流約10kmの桐生市でもすでにグランド等として高水敷の利用が行われているが、一部にはまだ植生の豊富な堤外地が残っている。ここ２年程の間にこうした植生豊かな区間が、せせらぎ水路等をもつ公園や、多目的広場に整備された。また、桐生市内を流れる渡良瀬川の支川桐生川では、これまでの治水事業の続きとして、低水路拡幅に伴うブロック張りの護岸と河床平滑化が行われた。いずれの事業に対しても工事中から批判的な声が聞こえてきた。そこで本研究ではこの２カ所の整備を取り上げ、一般市民を対象にアンケート調査を行った。アンケートは市内の小学校にお願いして、５、６年生の児童にアンケート用紙を家庭に持ち帰ってもらい、父兄に回答してもらったのち担任の先生に提出してもらうという方式で行った。桐生市の15小学校のうち６小学校にお願いし、内５小学校に快く協力して頂いた。図-1は整備箇所および協力頂いた小学校の位置と以後の解析に用いる地域のブロック化を示したものである。黒丸が整備箇所で、三角が小学校の位置である。また、ブロックは全部で11ブロックとし、渡良瀬川に近い方が若い数字、それから離れるに従って数字が大きくなるようにした。

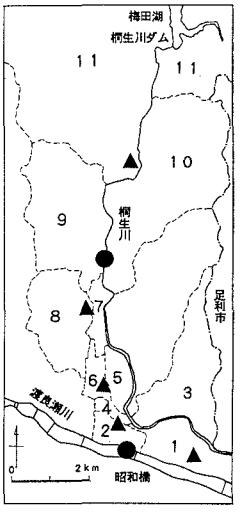

図-1　調査位置図

３．アンケートの内容

アンケートは17の設問から成り、1.住所、2.年齢と性別、3.渡良瀬川の整備を知っているか、また利用回数、4.整備して良くなった点、悪くなった点、5.総合的に判断して整備は成功か失敗か、6.桐生川の整備を知っているか、7.どのように感じているか、8.総合的な評価、9.2カ所の整備のいずれかでも成功と思っている人に今後の河川整備の進め方について、10.失敗と思っている人にどこが不満か、11.もし自身が計画するならばどのような整備にするか、12.割高でも多自然型工法を望むか、13.と14.では計画への住民参加に関連して、参加の意志、どのような意見反映形式を望むか、15.と16.では自分の意見を形成していくバックグランドの調査の意味で、過去の大災害である昭和22年のカスリン台風のことを知っているかどうか、また、現在住んでいる所が安全と思っているかどうか、最後の17.は河川整備に関して何か意見あれば何でも書いて下さい、という形式にした。以下ではこれらに対する回答結果を解析していく。

４．アンケートの回答の解析

<アンケートの回収の概要>アンケートは前述のように５、６年の児童の父兄にお願いしたが、一番北の

梅田南小学校だけは全校児童の父兄にお願いした。しかし、これでこの地区だけ極端に母集団が大きくなるということはない。ちなみに梅田南小学校の全児童数は298人で、他の小学校の５、６年生の児童数は、140人、233人、170人、228人である。全配布数はこれらの合計である1069枚で、このうち835枚の回答を得た。回収率は78%でかなりの高率となった。

＜２カ所の整備を知っているか＞ 図-2は2カ所の整備を知っているかどうかの結果をブロック別にまとめたものである。835人の回答者のうち渡良瀬川の整備を知っている者が622人、桐生川の整備を知っている者が457人で、その全回答者数に対する割合は渡良瀬川74%、桐生川55%である。ブロック別に見るとやはり近い所の整備ほどよく知っている（すなわち、ブロック番号の若い地域が渡良瀬川整備を、ブロック番号の大きい地域が桐生川整備をよく知っている）ことが分かる。男女別ではやはり男の方がよく知っている。

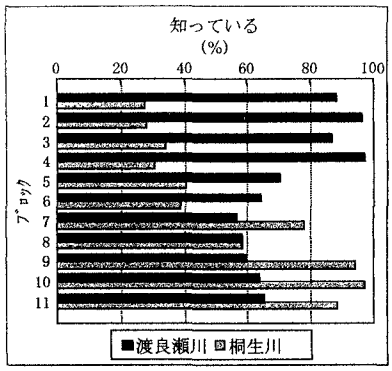

図-2両地域の整備を知っているか

＜総合評価＞ 図-3は両地点の整備の総合的評価を「成功」、「半成功」、「半失敗」、「失敗」の4段階で行ってもらった結果である。渡良瀬川では76%の人が「成功」または「半成功」と思っている。このアンケートを考えたきっかけが、自然を破壊したことに対する苦情を耳にしたことから考えると、全く予想外の結果と言わざるをえない。この１つの理由は、苦情を多く聞いたのは工事中であり、整備がかなり進んだ状態となれば（まだ、完工ではないが）見栄えがよくなるために判定も良くなるのであろう。これは整備のＰＲをもっと積極的に行う必要があることを示唆している。桐生川整備に対しては、渡良瀬川整備と比較して「成功」、「半成功」と思う人の率は少ないがそれでも66%の人が失敗ではないと思っている。ただ、整備地点に近い地域の人ほど失敗と評価している人が増え、シビアな意見を書いている人が多い。図-4は両地点で男女別に表現したもので、男の方が失敗と判定する割合が多いことが分る。

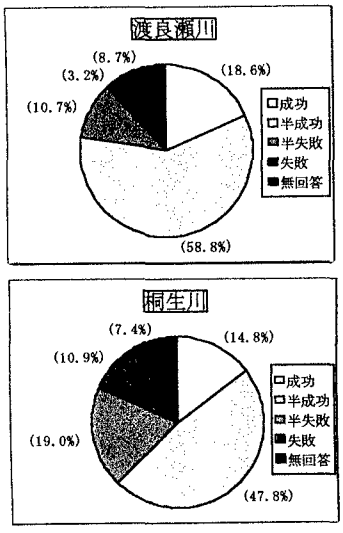

図-3　成功か失敗か

＜多自然型工法を望むか＞ 図-5は割高でも多自然型工法を望むかについてきいた結果である。この図から圧倒的多数の人が割高でも多自然型工法を望むことが分かるが、一方では１割程度の人はまだ安全性優先を考えていることが分かる。

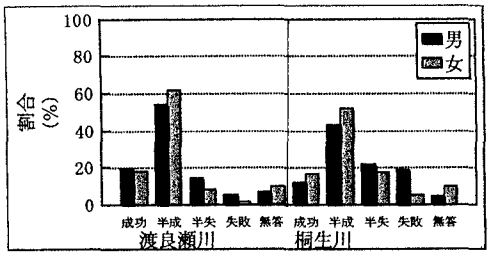

図-4　成功か失敗かの男女別

＜計画立案に参加したいか＞ 図-6は河川整備の計画立案時から立案に参加したいかどうかをきいたものである。横軸の１は参加「したい」、２は「興味はあるが参加まではしない」、３は「全く興味がない」、である。興味はあるが参加まではしない、という人がほとんどであるが、やはりここでも男の方が参加の意欲は高い。

最後に本アンケートを行うに当り、快くご協力を頂いた各小学校の校長先生並びに関係者各位に深甚なる感謝の意を表します。なお、本研究は河川環境管理財団の研究助成を受けて行ったことを記して、感謝の意を表する。

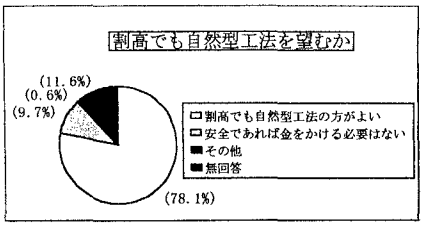

図-5　自然工法を望むか

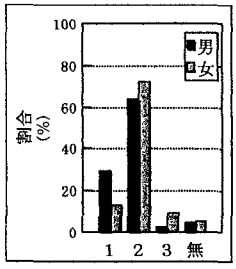

図-6　住民参加の意志